文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間　会報 No.63　2013 年 2 月 3 日発行
川崎市幸区古市場 2-109　京浜協同劇団内　TEL 044-511-4951　郵便振替 00250-3-18369

「人のあかし」～ある憲兵の記録から～

公演をありがとうございました

松山　英司

「撫順戦犯管理所」ってどんなところですか？　そこで何があったのですか？

その答えが、第一場「坦白（タンパイ）」の場面です。

「初年兵に度胸をつけさせるために、中国人捕虜を生きたまま刺し殺させました！」

「村民の皆殺しを命じ、逃げ遅れた老人、子ども、赤ん坊も銃剣で突き殺させました！」

「婦人を殺すとき、裸にして輪姦し、…」

宮田の坦白はまだまだ続いた。聞くに堪えないこのような「坦白」が、人が変わってつぎつぎと続いた。「毒ガスで…」、「ペスト菌の空中散布を…」、「生体実験を…」、「マルタを全員殺害し…」、「ウサギ狩り作戦で…」、「従軍慰安婦を…」、と続いて、最後に渡部正一が、「憲兵になってから、直接間接に殺した中国人は 328 人、逮捕し拷問にかけ、監獄につないだのは 917 人であります…」と証言したのです。

そうなのです。撫順戦犯管理所で行われたこの「坦白」という事実こそが核心的なことであります、おおぜいの人に知っていただきたいことなのです。中国人を「虫けら」のごとくに扱って蹂躙してきた己の過ちを悔い、心の底からの反省の念がなければ、この「坦白」という行為には至りません。和田庸子さんから脚本を見せていただいたとき、この場面からはじまる脚本の構成に、私はこの劇の“成功”を確信しました。そして稽古を見せてもらって、役者の皆さんの熱意と真剣さに接してそれはますます揺るぎないものに変わりました。

真の反省。真の謝罪。真の行動。……（写真：長坂クニヒロ 以下同）

たしかに日本軍も多くの戦死者を出し、沖縄の悲劇や、ヒロシマ、ナガサキ、東京大空襲など、多くの国民が体験して甚大な被害を被っています。その体験を語り残すことはもちろん重要です。しかし、被害を受けた側からはなにを反省すればいいのでしょうか。

一方、日本軍が中国でなにをしてきたのかについては、芝居に出てきた宮田や渡部正一たちの証言は、中国全線での侵略戦争の膨大な事実のなかのホンの一部にすぎないことは明らかでしょう。撫順戦犯管理所を体験してきたごく少数の方たちを除いて、中国で戦争を体験してきた元日本兵のほとんどはこの事実について口をつぐみ、あの世へ持って行ってしまったことでしょう。すでにこの膨大な事実が「無かったこと」になってしまったのです。

それだけに、また逆に考えればこの「坦白」からはじまった貴重な“良心の灯火”を中帰連の方たちが残してくれたのだと思います。この度の「人のあかし」公演は、観劇された 900 人の人にこの“良心の灯火”を点火してくれたことだと思います。おおぜいの感想文に書かれていた「感動」「感激」「感謝」の文字がそれを表していると思います。

撫順戦犯管理所を体験してきた人たちは帰国後、中国帰還者連絡会（中帰連）、を結成して、今日まで営々と証言活動を続けられてきたことは何ものにも代えがたい貴重な財産であります。

しかしもう一つどうしても忘れてならないことは、先の「坦白」に導いた管理所長や職員たちの献身性についてです。そして当時の建国間もない中国の指導者たちの指導についてです。第一場の最初のセリフが、通訳を介した所長の「皆さんはこの撫順戦犯管理所に来てそろそろ４年を過ごしたことになりますね」ということばを思いおこして下さい。そうなのです。「坦白」にいたるまでに４年の年月を要しているのです。しかもこの時点では、第六場で散髪を待ちながら「僕、宮田中隊長の坦白にはショックを受けましたよ」「あそこまで言うのかって……おらドキンとしたよ」という会話のような状態だったのです。その後、全員が「坦白」を終わって帰国するまでには、じっさいにあと２年近くかかっているのです。

戦争が終わって、シベリアへ５年間も抑留されて、「帰国だ！」とだまされて乗った貨物列車で中国へ引

き渡された約 1000 名は、中国に引き渡されて撫順戦犯管理所に収容された。管理所では強制労働もなく、3 食の米の飯で栄養管理から健康管理まで至れり尽くせりの環境のなかで、しかしこのような環境が彼らを「坦白」に導いたわけではない。それはひとつの条件にすぎない。かつての敵、しかも身内を殺され、自らも傷つけられ、足蹴にされた日本軍への憎しみは、私たちの想像をはるかに超えるものがあるでしょう。こらえての献身的な管理所長以下の職員たちは戦犯たちの人間性を尊重した対応によって「坦白」にまで導いてくれたのです。

残念ながら、“良心の灯火”の証言者たちが、超高齢のために誰もいなくなる日もそう遠くありません。今のこの時期に行われた「人のあかし」の公演は、限りないほどの大きな意味があることでしょう。撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部は、人のあかし公演に文化の仲間の皆さんとともに協力団体としてお手伝いさせていただいたことをこの上ない喜びとするものです。

脚本を書かれた和田さん、劇団の皆さん、文化の仲間の皆さん、観劇者のみなさん、すべての皆さんに感謝します。最後に、できることなら再演、再々演、出張公演を、と望むのは欲ばりでしょうか。

（撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部）

「人のあかし」の随想

日中友好の橋をかけたい

張　民

「人のあかし」の通訳として客演させて頂いて、とてもいい成長のチャンスだと思いました。劇団の皆さん、ありがとうございます。

実は、今回の芝居は、私の初舞台でした。芝居の経験はぜんぜんなかった。どんな風に演じればいいですか？

私にとって、大きな課題でした。ネットのいろいろな資料やドラマを勉強して、少し台本の背景がわかりました。通訳と同じ時代、似てる仕事をした親戚は今まだ生

「みなさんはもう軍国主義の兵隊ではありません」

「私は……」 坦白（タンパイ）が続く――

きています。通訳という人物の性格や心理を考えて、表情や話し方を真似しました。

藤井さんと和田さんに感謝しています。最初、私は発音やアクセント、声などが良くないので、ゼロから、藤井さんと和田さんに、教えて頂いて、だんだんできるようになりました。多分、人生もそのとおり、努力と根性でうまくいくと思います。心は強くなりました。

芝居の中の、三つの場面が好きです。

一つ目は散髪の場面です。怒鳴ることと喧嘩のことはリアリズム、実感があります。私は、いっぱい逆境の中で生きてきましたから、人物の気持ちはよく理解することができました。怒鳴るのは自分の情緒を抑えることができないからです。本当は、寂しくて怖いのです。自分に怒鳴るだけです。

二つ目は拷問場面の最後の部分。渡部が憲兵として、強くて、偉い仕事をしました。でも、自分の奥さんを前に、心の一番やわらかい部分が現れます。やはり人間ですから、表情はいくら強くても、心はやわらかいです。多分、人間という動物の本性かもしれません。私は、中国にいた時に、ドラマや映画などで、このような場面を見たことはありませんでした。この場面を見たら、やはり、同じ人間ということを強く感じています。

三つ目。芝居の最後の台詞は素晴らしいと思います。とても印象深いです。「東日本大震災と原発事故から一年半、毎日大変です、私ら自身が変わっていくまたとないチャンスかもしれねって思うのす。」過去と現在が、よく繋がっています。

「人のあかし」の台本を読んで、初めて、渡部のような日本人は天皇の軍隊と侵略戦争の犠牲者、被害者の一人であるということがわかりました。自分もよくわかりません、知らず知らず平頂山の話を見ます。この芝居通して、初めて、日本人の立場を考えます。京浜協同劇団の皆さんは優しくて、優秀な方です。中国人の皆さんに伝えたいです。私はこれから、文章を書くべきです。日中友好の橋をかけたいです。

月並みな言葉だけど。。。前を向こう。。。日本人も、中国人も、あの戦争を乗り越えましょう！

「人のあかし」公演に出演して

セリフを2か月で1000回唱え

尾崎　隆一

私はこのたびの「人のあかし」公演で撫順戦犯管理所の所長役を務めました。

これまで演劇とは縁のなかった私が客演したきっかけは、10月8日に「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」神奈川支部の会合で私が9月の撫順旅行の報告をしていたところ、京浜協同劇団の水野さん、和田さん、護柔さんが見えられ、まだ決まっていない配役があり協力を求められました。その配役とは撫順戦犯管理所の所長役で、セリフは中国語なので中国語が話せて10回の公演に出演できることが条件でした。私はその場に居合わせた皆から推され、台本を見せてもらうと現代に生きる我々の心に訴える内容なので、中国語の学習歴が10数年あり撫順戦犯管理所を2回訪ねたことのある私は「ほかに適任者がいないのなら何とかやってみよう」と思い、引き受けることにしました。

構え！　突撃用意！　突撃！

私は40年前、予備校生の時に世界史の先生から薦められて中国帰還者連絡会編著の「侵略」「三光」を読み、日本軍が中国で行ったあまりの残虐行為に強いショックを受けました。その後中国語を学ぶ機会があり、4年前には撫順へ一人旅をし、帰国してから「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」に入会し、元戦犯の方々の証言集会に何度も参加しました。土屋芳雄さんの関係では「聞き書き・ある憲兵の記録」（朝日文庫）、「人間の良心」（花烏賊康繁著）を読み、3年前には左右田一平さんの一人芝居「月山が見ている」を観ました。

私は稽古を始めた頃、人前で演技したこともないので棒立ちでセリフを言うしかなく演出の藤井さんに呆れられてしまいました。セリフを覚えるのも大変で1日に30数回唱えることを日課にし、2か月間で1000回を目標にしました。また、演出班からは視線を観客全体に向けるようにと指示を受けました。本番の緊張感は並大抵ではなく、足が震えて動けなくなるほどでした。私の相方の通訳役の張民さんも演劇経験がないので2人で励まし合って稽古を積み、無事に10回の公演を乗り切ることができました。

私は友人達に川崎のこの劇団の演劇文化の底力を知ってもらいたいと思い、この公演に誘いました。公演を観た友人達は口々に「その真摯なセリフの一つひとつに終始涙が止まらず、周りの人々もハンカチで涙を拭いていた。」と言いました。私も劇団の皆さんの入魂の演技に感動して涙を流した1人でした。

最終公演が終わったあと打ち上げ会がありましたが、客演の私はこれで縁が切れると思うと寂しくなり、その席上で後援会組織「文化の仲間」への入会を表明しました。私はこれから「2か月間同じ釜のメシを食べた仲間」の劇団員の皆さんを応援する側に回ります。どうぞよろしくお願いいたします。

「責任」と「未来」を考えさせてもらった

須藤　ゆり

教科書では決して習うことのない歴史、いや現代の教科書では習うことのできない歴史、その一端をこの劇を見ることによって垣間見ることができました。それは現在の日本国が認めない真実であり、終わっていない戦争を一人ひとりの「人間」が逃れられない恐怖（コウカイ）と「狂気の本質」とともに暴露してくれたように思えました。

劇中で主人公の男は、自分は「鬼」になったと言っていました。戦場の狂気の渦が人を鬼にしてしまったと……。しかしそこで思ったのは、巨大な渦が起き、巻き込まれ、否応なく「鬼」となってしまったとしても、その「自分」を語る人のなんて少ないことだろうということです。一人ひとり後悔や罪悪感を抱えていたと思います。中にはそうでない人もいるかもしれないけれど……。けれど人は「鬼」や「狂気」に責任転嫁していると私は思ったのです。「鬼」など存在しなかった。ただ逃れられない現実と決めつけ、自分の犯した罪か

「お前が抗日組織の拡大をしていることはわかっている」

日本人になぜここまでするのか……

ら逃げるために作り上げたもう一人の自分であると。

たしかに狂気はウィルスのように人から人へと感染し蔓延していったと思います。しかし人は人として生きていたと思います。生きたい、死にたくない、苦しくやるせない思いを抱え、それでも自分の守りたい「何」かのために必死に生きていたと思います。だからこそ犯した罪を語れないのではないでしょうか。見えない力に抑えられたり、語りたくてもそれがかなわない状況にあったりと様々な理由があると思いますが、多くの人はきっと「語らない」と思います。それは人としてどれほど醜悪なことをしたのかを自らが誰よりも理解しているからだと、舞台で証言する男たちを見て感じました。そして自己保身や罪悪感から逃れるために周囲や狂気、戦争そして鬼のせいにしようとした、けれど主人公や周りの男たちは、自らの罪を証言しました。それこそが「未来」なのではないでしょうか。

私は戦争を知りません。どんな狂気や罪が起こり、どれだけの絶望があったのかも、まるで他人事です。だからこそ「紡がれる真実」が必要なのだと思います。過ちの先を生きた人に、それが責務であり本当に望む未来に繋がってくのだと。「狂気の蔓延」は誰も責任逃れはできないことです。自らが主体となり本当に望むものが何であるかを踏まえた上で真摯に考えたいです。そして、許されざる罪を背負っても誠意をもって「人」を全うした主人公に、改めて「責任」と「未来」を考えさせてもらったことを感謝します。

（劇団員の家族）

公開稽古と本番の間にあるものは？

西川　日女子

11 月 18 日（日）の公開稽古を観てからわずか 20 日の間にこんなに舞台が完成度を増すなんて、まさに驚きでした。本番は千秋楽の前日の 12 月 8 日（土）の夜公演で観劇しました。

公開稽古のときは鉛筆で描かれたデッサンのようでした。それが本番では鮮やかな色彩が入り陰影も描きこまれた油絵のようだったのです。さらに公開稽古のときにはなかった音響や照明が入り、装置が整えられ、役者たちも役柄にそった衣裳をまとって動き出す、まるで芝居の神様が乗り移ったように……。

公開稽古のときは時々胸にぐっと迫ってきて涙ぐんだことが 2 ～ 3 回あったのですが、本番のときは終盤 1 回だけうるうるとしただけで、1 時間 45 分の上演中、役者たちの熱演に引き込まれ、あまり涙が出なかったのです。戦争のおろかしさ、軍隊の非人間性が強烈に迫ってきて思わず肩に力が入り緊張した状態で観ていました。

公開稽古のとき、ある劇団の女優さんが、「自分も演じる側として失礼ながら」とことわった上で、「渡部正一が被害者の遺族に謝罪のために中国へ行ったとき、遺族と握手したことに違和感を覚えた」と話しておられましたが、私も同じ思いだったのです。あのとき本当に握手をする気持ちになれたのだろうか、少し不自然ではないか、無理があるのではないか、と思ったのです。それが本番では握手をせず、遺族を演じた和田庸子さんが、加害者の渡部正一を演じた護柔一さんをじっと見つめ、いったん帰りかけてからもう一度振り返り悲痛な表情で帰っていく姿がとても印象的で

「私の気持ちがあなたにわかりますか」――真の和解は……

良かったのです。芝居というものがこのようにひとつの場面でも変更を重ねながら作り上げられていくのだ、ということを実際に体験させていただき、知ることができました。

私はこの時代のことをほとんど学んでこなかったため、今回の公演で初めて歴史の事実を知ったのです。私の子どもや孫に正しく伝えていかなければいけないと思うのですが、果たしてどうすれば良いのでしょうか。宿題を出されたのですね。

最後になりましたが、短期間にこの台本を書き上げた和田庸子さんに、まず脱帽します。また演出家から多くの駄目出しをされながらも、めげずに凝縮されたすばらしい舞台を作り上げた劇団員ならびに協力出演者の皆様、およびスタッフに心から感謝とねぎらいの言葉を贈ります。どうもお疲れ様でした。

（文化の仲間・世話人）

第７回お正月お楽しみ会

71 名の参加で大成功

渡辺　そのこ

年明け最初の行事、文化の仲間のお楽しみ会が１月15 日に京浜協同劇団の稽古場で行われました。

この行事は、この場所に京浜協同劇団があることを、もっと地域の人に知ってもらいたい、子ども向けの企画で大人も引っ張り込んで劇団に来てもらおうというねらいで始めて、今年で７年目になります。

今年も、踊りあり、お話あり、ゲームありと、盛りだくさん。その中で、何と言っても子どもたち !!

初めて出演する子ども腹話術は、小学３年生が人形と自分のセリフにメリハリをつけ、大人顔負けの芸をみせてくれました。物言いが師匠に似ていて、素直に芸を受け継いでいるのがうかがえました。

朗読グループ（写真：山木健介 以下同）

ジュニアダンス

ジュニアダンスは、男の子２名がメンバーに加わり、髪の毛もちゃんとセットして、女の子たちと元気いっぱい踊ってくれました。

大人も挑戦します。フラダンスや朗読、出演された方も生き生きと楽しそうでした。

劇団の護柔さん、プログラムは「傘まわし」なのに玉簾？　「傘まわしはまだまだで……」と、傘をまわし、ボールをのせ……あぁ……。それでも傘の上で半周まわったか ?!　でもスゴイ！　練習の成果をみせてくれました。

城谷さんとゴローちゃんの司会で

子ども腹話術のみなさん

今年は突然の大雪。子どもたちが来ないのではと、心配しましたが、未就学児童２名、小学生 22 名、大人 47 名、合計 71 名の参加で大成功！

次回もたくさんの子どもたちが参加してもらえるよう、そして、劇団をもっと知ってもらえるよう、さぁ、今年も、文化の仲間、動き出します。

（文化の仲間世話人）

フラダンス

護柔さん傘回しに挑戦

京浜協同劇団と私（3）

腹にズシリと溜まった芝居

安達　元彦

今年（2013 年）でぼくの「京浜協同劇団歴」45 年になります。その間係わってきた作品数約 60 本（作曲以外の協力など、それから新人公演も含む）。その中から 3 つあげろと言われたら『九〇二番船、進水』(1974)、『牙白く』（1978)、『京浜・１９７９』（1979）ということになります。5 つとなるとプラス『ふかい疵』(2002)、『金魚修羅記』(1997)。7 つだとさらに『ゼロの記録』(1981)、『麦の穂のように』(1990) かなァ？

なぜこうなるのか？　われながらちょっと不思議な気もします。もっと大きなもの（規模だけでなくテーマも）や、話題作・問題作も他に数々あったのに……。

そう熟慮しているわけでもないのですが、ぼくの中に「京浜協同劇団らしさ」という思い込みがやはりどこかにあるのかもしれない。

はじめにあげた 3 つは「労働者もの」、というより「労働現場もの」。さらに『九〇二番船、進水』と『京浜・１９７９』の 2 つは劇団集団創作、しかも後者は前者の 5 年後の事態を再考するという意図をもった同一テーマ（問題意識）です。

『九〇二番船、進水』は鮮烈でした。造船所をイメージした広々とバカデカい装置（佐藤張二)。出て来る労働者たち誰もかれも、ぼくから見ると皆まぶしいばかりに輝いていました。山本忠利さんの明るい瞳と口元と頬。細田寿郎さんのドッカと座った腰と声の太ぶとさ。堤次郎さん「とーっても我慢がァー、できなかァったヨー」(北島三郎「函館の女」) の立小便姿（もちろん後ろ向き)。佐藤張二さんが舞台の袖から袖へただ歩くだけなんだけど途中でいったん止まって客席をひと睨み。役は職制だったのかもしれませんが、その姿はどう見ても労働者そのもの（ひょっとしたら佐藤さん生涯ただ一度の舞台姿？)。

「九〇二番船、進水」の舞台（写真：長坂クニヒロ）

もしかしてこの時期（70 年代半ば)、すでに世間は「労働者」という言葉はかつてのような瑞々しい響きを失いかけていたのかもしれません。かわって「サラリーマン」という言葉が当事者からも世間一般からもややうつむき加減の心持で使われていくといった動きでしょうか？　そういったとき敢えて「労働者劇団」を標榜する京浜協同劇団のこの芝居は、そういう風潮への「てやんでぇー！」。ともかく、自身労働者でなく、前稿のように労働者と出会って間もないぼくにとって、この芝居は腹にズシリと溜まりました。

『京浜・１９７９』は苦渋に満ちていました。国と企業の烈しい攻撃にズタズタにされ、苦しい事情をかかえ涙をのんで去っていく闘士たち。印象深かったのはラストシーン。近づくクレーンの音が脅迫的に聞こえる中、一番ひ弱で真っ先に脱落しそうな新米のヒョロヒョロの 2 人が、頼りなげにしかし最後まで踏みとどまっている姿。京浜協同劇団の血を吐くような悲願がありました。ラストソングの中沢研郎さん（故人）によるムツカシい、およそ歌になりそうにない言葉に「コンチクショウ」と挑んだのも今となっては懐かしい。

『牙白く（西尾顕爾・作)』は東京新聞との協同企画。中日新聞に乗っ取られ分裂させられながら、「東京新聞」という紙名だけは辛くも守りぬいた記録にもとづくもの。里見さんという人の案内で職場見学に行き、圧倒的少数派のこの第一組合員の圧倒的多数派の第二組合員への静かで明るいしかし堂々とした対応にシャッポを脱ぎました。以来、うちはそれまでの朝日新聞から東京新聞に乗り換えています。東京新聞のしっかりした論調を読むたび「ああ、あの人たちが頑張っているんだなぁ」と思ったりしています。この芝居では、労働者が自分たちの今を本音でうたうとき、その声色の底深いリアリズムに「ハッ！」とさせられました。

1980 年（写真：長坂クニヒロ）

川崎郷土・市民劇　「大いなる家族」

復興に起ち上がる人々を描く

京浜協同劇団　城谷　護

劇団の次回作品は、小川信夫さんの力作「大いなる家族―戦後川崎ものがたり」です。これは、戦争の傷跡を背負った人々が様々な困難を抱えながらも助け合って生きていく姿を描いたオリジナル作品です。沖縄から来た人々が沖縄芸能の伝統を引き継ぎながら川崎に根付いていく様も織り込んで、楽しめるものになっています。

震災被災地に思いを寄せながら

作者は当初、佐藤惣之助の評伝劇を書こうとしていましたが、3・11 の大地震が起きてから、この作品に切り替えたといいます。戦後の惨状から起ちあがった人々を描くことによって東日本大震災で被災した人々に寄り添い励ますことができないだろうかと考えたのです。身を寄せ合う「ムラ共同体意識」の根底にある相互依存の関係こそ日本人の「絆の強さ」ではないかと気づいたというのです。

演出は東京芸術座の杉本孝司氏が当たります。杉本氏は京浜協同劇団の「ミスター・チムニー　天空百三十尺の男」、「黒と白のピエタ」で和田庸子の書下ろし作品を演出、好評を得た演出家です。

劇団の総力をあげて

ところで、この川崎郷土・市民劇というのは、川崎の歴史上の出来事や人物を描いた創作劇を市民の手で創ろうというのが趣旨で、2006 年に「多摩川に虹をかけた男―田中兵庫物語」を上演したのが始まりです。その後２年ごとに、「池上幸豊とその妻」、「枡形城・落日の舞い」を上演してきました。毎回、30 数人の有力者たちが実行委員会をつくり、３千数百人もの観客を集めてきました。私たち京浜協同劇団はスケジュール等により、全力投球できるときも代表派遣でしか参加できないときもありましたが、今回は劇団の本公演と位置付け、総力をあげて取り組むことにしました。

そのため、制作には城谷護、水野哲夫を、演出助手には内田勉、そして衣裳、小道具などでも力を発揮することになりました。俳優陣も若菜とき子、藤井康雄、瀬谷やほこ、稲垣美恵子、護柔一、渡辺高志、坂木フミ、大谷敏行、上村健太郎、斉藤成郎らが出演します。ほかに他劇団、市民参加が約 30 名です。

どうぞご期待ください。

東日本大震災復興祈願　第４回川崎郷土・市民劇

大いなる家族

―戦後川崎ものがたり―

人のぬくもり、
支えあい
復興に立ち上がる人々を
描く創作劇

作　小川信夫　　**演出**　杉本孝司（東京芸術座）

日程と会場　2013 年５月 2 日(木) 夜／ 3 日(金) 昼／ 4 日(土) 昼　多摩市民館
5 月 24 日(金) 夜／25 日(土) 昼／ 26 日(日) 昼　教育文化会館
昼：午後２時開演　　夜：午後７時開演

入場料　前売：Ａ席（自由席）大人 2500 円／小学～大学生・身障者 1000 円　（当日券は各 500 円増）
：Ｓ席（指定席）大人 3500 円　（学生・身障者前売券及び当日券なし）

問合せ・申込み　京浜協同劇団（044-511-4951）ほか

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市民劇場　第 312 回例会
劇団前進座公演　夢千代日記

日程・会場　２月４日(月)・５日(火) エポック中原
２月９日(土) 幸市民館

原作　早坂暁／台本　志村智雄／演出　志村智雄・橋本英治／出演　今村文美・高橋佑一郎・いまむらいずみ　ほか

舞台は山陰の小さな温泉町。胎内被爆であと３年の命と宣告されながら、健気に生きる夢千代を取り巻く人間模様。

申込・問合せ　溝の口事務所　044-455-7950
川崎事務所　044-244-7481

◆劇団民藝公演　真夜中の太陽

日程　２月 13 日（水）～ 24 日（日）
昼の部 14:00 開演　夜の部 19:00 開演

会場　紀伊國屋サザンシアター

原案・音楽　谷山浩子／作　工藤千夏／演出　武田弘一郎／出演　日色ともゑ・中地美佐子・齊藤尊史・平松敬綱　ほか

入場料　一般 6300 円　学生割引 3150 円　夜チケット（全席）4000 円

『真夜中の太陽』は、劇作家の工藤千夏氏（劇団青年団）がシンガーソングライターの谷山浩子氏の同曲をモチーフに自由に創作した幻想的な物語。2009 年に初演され、静かに戦争の悲しみを訴えたが、このたび、民藝が新たに舞台化する。

申込・問合せ　劇団民藝　044-987-7711（月～土 10:00 ～ 18:00）

◆原発ゼロへのカウントダウン in かわさき

日程・会場　３月 10 日（日）　中原平和公園

主催　実行委員会

昨年の３月 11 日に続き、今年も「原発をなくしたい」という思いの一点で党派や思想信条を超えて、原発ゼロ集会を開催します。また、川崎金曜行動（２月１日〈金〉～３月８日〈金〉の 18:00 ～ 20:00 川崎ラゾーナ前コンコース）で原発ゼロの市民へのアピールも行っています。

問合せ　実行委員会事務局（丸山）　044-722-4445（川崎中部建設労働組合）

◆音声による表現の世界へようこそ！　朗読劇
川崎朗読教室合同発表会

日程　３月 15 日（金）

会場　てくのかわさきホール（武蔵溝ノ口駅徒歩５分）

主催　小田健也事務所

演目　女賊・瘤取り・カチカチ山（太宰治）／井伏鱒二の詩（茨木のり子）

出演者　稲垣美恵子・小嶋宏子・坂木フミ・瀬谷やほ子 ほか（かわさき朗読教室）／山寺圭子 ほか（文芸朗読教室）

入場料　1000 円

問合せ　平野 090-4661-8655　渡辺 090-6341-5696

◆川崎市民劇場　第 313 回例会
劇団昴公演　隣で浮気？

日程・会場　４月６日（土）幸市民館
４月８日（月）・９日（火）エポック中原

作　アラン・エイクボーン／翻訳　三輪えり花／演出　ニコラス・バーター／出演　宮本充・岡田吉弘・林佳代子・落合るみ　ほか

性格や考え方の異なる三組の夫婦がひとつの居間を絶妙のタイミングで使い分けるラブコメディ。観客はふしぎな体験を味わう！

◆山寺圭子「うた・唄・歌」“春にうたう”

日程　４月 26 日（金）午後７時開演

会場　めぐろパーシモンホール（小ホール）

ソプラノ　山寺圭子／ピアノ　朝岡真木子

主な演目　花（滝廉太郎）／おぼろ月夜（文部省唱歌）／夢･ばら（トスティ）／音楽によせて･春に（シューベルト）／わたしが一番きれいだったとき（朝岡真木子）

入場料　一般 3500 円　高校生以下 2000 円（全席自由）

問合せ　山寺圭子　044-511-8995

◆ドキュメンタリー　立入禁止区域・双葉
――されど我が故郷　記録映画

日程　2013 年５月９日（木）　午後２時・４時・７時

会場　川崎市総合自治会館（武蔵小杉･中原警察署向）

入場料　500 円　全席自由

構成・監督　佐藤武光／ナレーター 市原悦子

主催　第 55 回川崎母親大会実行委員会

大震災と原発事故で、故郷に何が起きているのか !? なぜ、自分たちの故郷を離れなければならないのか !? 被災地の現実と、被害者の真実を伝える衝撃のドキュメント映像！

問合せ　事務局　044-888-7110

■文化の仲間ギャラリー■　　小野寺 晃⑨